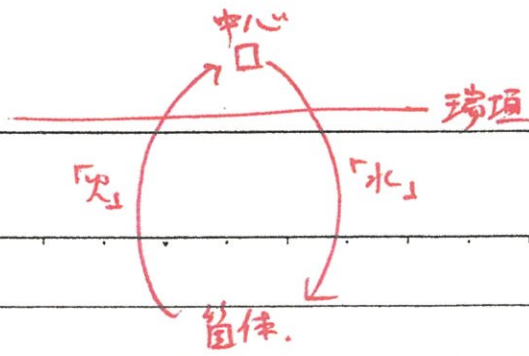
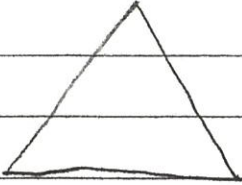


2019.5.28.(火)



ヒは

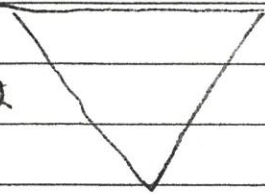


ノボルモノ

であり。

(地の水↑と同じ)

ミヅは

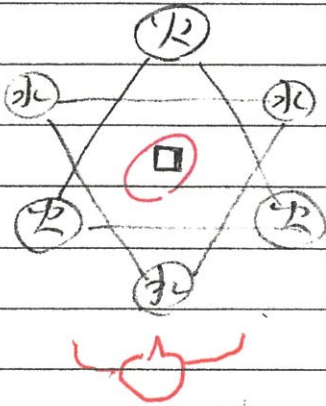


「ウダモノ」

であり。

(天の水↓と同じ)

①

これもまた、中心と外郭を表す。

平面上なので六芒星形にしているが、

意味内容は  と同じ。真相はイへのアルジとしての一点である。

ミヅをミキに代えているのは、酒は数理としては五なので、

「これから上昇すべき」という点を強調したのか？

→ あとは、「火」で無宇宙を表現し、

(「水」ではなく)「酒」で宇宙(筒体)を表現している

ものと考えざるべきかも知れない。

(人間の身魂は、宇宙の側に経緯のある筒体とに存在しているので、
数理としては「五」である。)

② 通夜祭における三灯は、

ミンスビ

三産魂としての故人の直白と表現したもの。

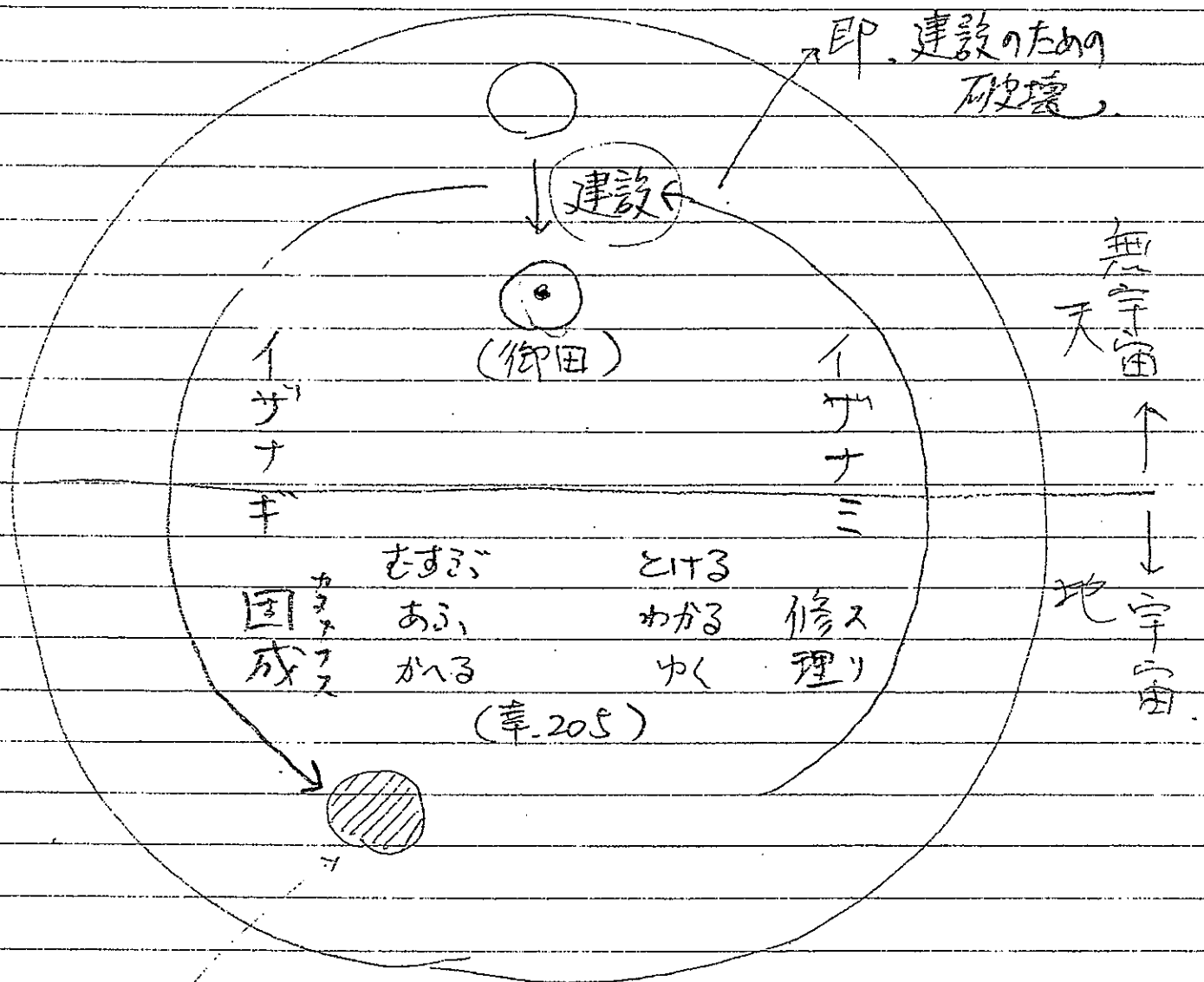
「火」は、それが無宇宙の存在であることの表現。

「三」は、数型としての「三」で、「極の内部が三つに三つある」

という時の「三」と同様。

「あひつ、わかれつ、とけつ、むすびつ」という原理を

表現したものと思われる。



「イザナギノカミの神業の成り成りたる日」

「天地は存在の尽る統一りにたる」という状況

アツク

アリ

ニゴト

ミエタ

其ノ神儀行事ハ古來複雑ナル傳ヘア
ガ如クナリト雖、言トシテハ、

あまてらすおほみかみ・あまてら
すすめおほみかみ・あまてらしま
しますすすめおほみかみ

教ヘラレタルヲ日本民族ノ久シク捧
シ來レルトコロトナス。

あひがてんじんゆうあいこう

教ヘラレタルモ之ト等シキ神言ナリ。

相トシテハ一圓光明體ニシテ古來○

言キタルヲ最簡明ナリトナス。此ノ

ハ文字トシテ日本・支那・中央亞細

・東部歐羅巴等ニ教ヘ來リタレドモ、

久シクシテ此ノ文ノ原義ヲ知ルモノ

ンキニ到リタルハ慨嘆スベキナリ。

高天原の神傳

○ヲ日本民族ハひと讀ミひつきトモ

云ヒひふみトモ呼ビあちめトモ稱シあ
まのみなかぬしのおほみかみたかみむ
すびのかみかむみむすびみおやのみこ
とトモ白シ奉レル秘文ナリ。

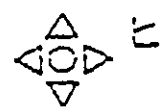
○ノ○ハ境地ヲ示シテ外廓ヲ教ヘ、

・ハ中心ヲ示シテ本體妙用ノ不一不二
ナルコトヲ知ラシメ、合セテ○トナシ
タルモノハ中心ト外廓トノ位置ヲ知ラ
シムルト共ニ相互ニ干犯スベカラザル
ノ理ト、相離ルベカラズ悖ルベカラズ
乱ルベカラズシテ本來本有ノ光明身
リ光明身ナラザルベカラズ光明身ト
サザルベカラザルモノナルガ、人ト
テ生レ來リシ責務ニシテ究極ノ目的
リトノ義ヲ教ヘラレタルナリ。

大日本建國ノ精神ハ此處ニ存リ。

庭経営ノ根本方針モ自己修養ノ基準

他人教化ノ目標モ共ニ同ジク此處ニ
ルナリ。

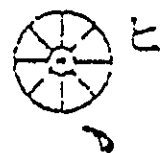


と描くも、

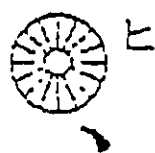


とするも、

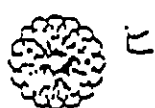
或は、



又は、

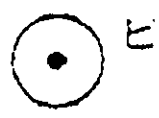


又或は、



と描

きまへるも、



と畫くに等しい

人間の死と「身魂城」の關係について

直日は、本來の神であるから、死と共に肉體身とは別れる。それは何如なる人も例外は無い。次ぎには、意識想念等の所謂心であるが、之は、その人の信仰何如に依つて、直日と俱に神界に入るものと、各界に分散するものとが別れる。奇魂・幸魂・眞魂・和魂・荒魂・術魂・直毘魂・等と呼びなす各々の御魂は、その人の存在するが故にそれ等各々の御魂であるのであるから、人の死と同時に分離するのが常道である。それで、御魂齋のノリ

トは、

「ユクヒトノ、ココロシレバ、カニカクニ、トクカヘリマセ、イツカシガモト」と教へて、人の死と同時に、その根本魂たる直日は、人間身統率の任務を終りて、その本の神位カミクラに歸り往くから、第二魂以下の御魂は、速に別離して、「身魂城」に移り止まるやうにと、その御魂を伊都伎祭るのである。重ねて白しますと、いかなる御魂をも、一度は必、常道に引き入れてから、それを更に聚めて、國津神と伊都伎祭り、産土神と成らしめ給ふのが、故人奉齋の筋道である。

立可和太

かたかた
きん

ゆい
の
止
の
び
し
れ
ら
な

岐志天津日高日子番能邇邇藝命が生れさせられたので、此の御子を降すやうにと白された」

私共人間世界で、之を聞くと、随分我儘勝手なやうにも思はれるが、「装束^{ヨツヒ}せる間に、大虚空中にて、皇孫は生れさせ給ふ」とは則、葦原中國の平定されたのである。之を、神界築成の天業と稱へまつる。

第二十二、「木花之佐久夜毘賣」

「邇邇藝命、久士布流多氣に天降り給ふ」

久士布流多氣の主神を「木花咲耶毘賣」と稱へまつりて、火の神にてまします。戸無き八尋殿を作り、其の内に入りまし、土^{ハニ}を以て塗塞ぎ、其の殿に火を着けて、御子産み給ふ。

此の祕事を、久士布流多氣の禊と稱へて、木花咲耶毘賣の主りましますところである。

第二十三、「鹽椎神^{シホツチノオヂ}」とは、「無間勝間^{マナシカタマ}の小船^{フナボネ}を造り、虚空津日高^{ソラミツヒタカ}を教へ導かれた」ので、天孫治國の大道たる日神事^{ミソノギ}の主神にてましますことは、前章以來屢次説明せるところ、また繰返すまでもないであらう。

鹽椎の翁が賜ひし勝間もよ。天地今や統一りにたる。

天地今ぞ統一る御魂。天地今や統一る御魂の神。

天地今や統一神。

此のやうに、「みそぎ」は、人の世神の代を通じて、一圓光明の零界を築き成す齋庭の祕事なのである。

『莫囂^{ムセウ}圓隣^{エンリン}とは歸日^{キニチ}止なれば死者の魂なり。根本中心たりし直日^{ナホヒ}なり』

人間身は、此に解體して、人間未知の天界に入り、或は、怖畏の魔獄に縛がる。その天界に入るものは、直^{ナホ}日^ヒであり、魔獄に縛がるものは術魂^{バケミクマ}である。

前生、人間世界に在りし時、病患苦悶の女を見て、日神事を授けたところが、直に復活して、天津神輪のを現した。その後、幾年ならずして、我死したれば、彼の女は、天窟座を出でて、全宇全宙の直日であること證明された。

直日本來神魔。中外幹枝亦皆日。

劫火洞然。婆子哄笑。

歌云。

ヤマトニハ、ヒトサハニヲリ。クニツチモ、

ミナヒカリタル。イツカシガモト。

『五可新何本とは齋庭ユニハなれば身魂城ミクマシロなり』

ミタマシロ、キヅキテスメバ、アメツチハ、

ヒカリミチタリ。ホガラホガラト。

斯くて、仰ぎ見るかぎり、伏して聞くかぎり、皆是、日であり、光であることを知る。

素ッ裸。スクスクとして今年竹。

解體解脫の極は奈何に。

堅固大成の極は奈何に。

『射立爲とは速別離去トクカヘリマセにして身魂ミタマシロに告ぐる言コトバなり』

『身魂ミタマシロとは直日ナホヒを根本中心となしたる群衆魂なれば靈念思考以下所云肉體身全般の名稱なり』

此の身と此の心と、彼の事と其の物と、結べば眞金よりも固く、解くれば水に浮べる膏アフラにも似る。

解き去り、剖き來れば、是の如きの一物。虚中を出で、虚中に歸る。

『此のノリトは。根本魂ナホヒたる直日ナホヒは今日今時人間身統率の任務を終りて歸り往くなれば。第二魂以下の身魂ミタマは速に別離して。此處に備へたる身魂城ミタマシロに移り住りませと人身に告ぐると共に乞ひ祈る言カミコトタマ靈なり。日本民族の傳承カミフサし來れる神事ヒメコトタマに此の祕言靈有リ。之れによりて人身構成の一端を窺ひ知らるると共に。人身とは魂タマシヒの聚散離合にして。其の根本中心魂ナホヒを直日ナホヒと稱すると共に。人身を解脱したる曉には日と稱へまつるなることを教へられたるなり』

中心か、外廓か。外廓か、中心か。

世人は之を知らずして、徒に憂悶を重ねつつあるのである。

之を知れば、高天原は現成し、日神は生れますので、太平嘉悦の神の國は成り成る。

神の零ヒの、結ぶを見れば、七色の綾面白く。五色の、君が倭文よ。賢木葉の、香こそはにほへ。八十伴の、緒こそは締め。その日止ヒトの、身こそは光れ。彼の火人ヒトの、業こそは成れ。成り成りて、人ヒトこそは知れ。人知らず、その一つ身に、天地の、神輪赫灼く。神代ながらに。

その神輪と白すのは、橘家ヒキメの傳書から學んで、高木神の證左を仰ぎ得た宇宙成壞スデミチの事理である。眞理マケであるもの則、事實コトである。

此の事で理であるものを、日本紀は、「天地と判れた時に、一つの物が、虚中に出來た。その狀貌カタチは説明するわけにいかぬ。が、おのづから化して、それがそのまま神であつた。それを、國常立尊クニトコタチノミコトとも、國底立尊クニソコタチノミコトともまをし

分割けることのできない

宇宙ろ有一切合切の

根本種子で象形な魂

①と描く

(根本中心)

(第二魂以下)

日←

↑

人身解脱

直日

身魂

タマシヒ

死者の魂

=

ミタマシヒ

(直日を根本中心とし

群衆魂)

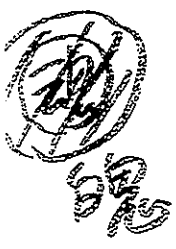
一念思考(ココロ)な結晶したもの

=

統一魂との肉体身

↑

王の緒↑魂と魂



上より下へ
分けを
し

身魂城

ミタマシヒ

=

五可新河本

(無の有一零々の
いは帰る大根本)

↓集める

国津神

産土神

布

多田山公秘稿

莫囂圖隣之大相七兄爪湯氣吾

瀬子之射立爲兼五可新何本。

之れを萬葉集に額田王の歌と傳へたるは傳寫の誤謬なれども別に其の證左とすべき文書の存るにはあらず。

唯、此の歌が身魂齋のノリトとして古老の傳へ来りしもの有るが爲に比較研究の結果、流布の萬葉集が誤謬なりと云ふに過ぎざるなり。

其の身魂齋のノリトとは、ユクヒトノココロシレバカニカクニトクカヘリマセイツカシガモト。

と云へるなるが、之れ亦、此の支那文字が直に此く讀み得るにはあらず。

古來難讀とせること當然とも云ふべきか。

莫囂圖とあるは圓なりとの義なり。

圓なるが故に莫囂なり。

莫囂とは圓を説明したるものにして、限定したるものにして莫囂なる圓なり、マトなり、マドカと讀むにはあらずとの意なり。

莫囂圖がマトなることは、萬葉集中にマトカタと云ひ、タカマトヤマと云へるに圓或は的の文字を充當てたる如く、目的地にして、目標にして、點なるなり、基準亦是標準標識と云ふに等しきなり。

其の點なるマトとは、圓満具足の點なりとの義にて、窮極なり極なりとの説明語なれば、極大極小極無極の火を指したるなり。

マガツヒと古典の傳へたるヒなり。

隣と書きたるは、其のヒなる莫囂圖にはあらずして、ヒの隣なりとの意なれば、極にあらず

して極の一步手前なりと云ふ程の義なり。

。極大極小の點にはあらずして最大最小の點なりとも云ふべく之れをアメと稱ふるなれば古典には天の文字を假借せるなり。

〔極大極小と最大最小との文字には此の如き區別を附し得べきなれども、現在日本にては混淆して最大最小の數と云ふが如く用る居るなれど、此の間の觀念を明瞭に把握する時は画然たる異別あることを認むべきなり。〕
莫囂圖隣之の之は接續詞の用例に依りて讀ませたるなれば、アメノと讀むなり。

されど、天之にはあらざるなり。

古事記の上表文にアメノミナカヌシノカミに天御中主神と充當てたるに等しき義なれば、接續詞にはあらざるなり。

〔古事記の上表文には天御中主神と記載しながら、其の本文に天之御中主神と書きたるを見れば、太安萬侶はアメノミナカヌシノカミの、接續詞なりとも、

然らずとも、神言靈が奈何にありとも思ひ及ばざりしもの如くなり。

大相七兄爪湯氣はミナカの義なれども、此の文字を充當てたるは闡門の祕事なれば筆録すること能はず。

ミソギのヒメカミワザとして傳承し來れるなり。

唯其の一角を示すことは必しも爲し得ざるにあらず。

此の七字の中心は兄にして、爪を従とし、七の數理と、兄爪の大相と、七の湯氣との義に採りてミナカの音義を説明せるなり。

吾瀬子之とは吾背子、或は吾兄、亦是單に兄の義に充當てて讀ませたる文字にして又シと讀むなり。

射立爲とは初のマトに應ずる語にして火なり、ヒの音義を示せるなり。

其の次に兼とあるは竄入なり。五可新何本はイツカシガモトのカナに充當てたるなり。

通じて讀めば五言十六音にし

て次の如くなり。

アメノ。ミナカ。又シ。ヒ。

イツカシガモト。

之れをユクヒトノ。ココロシレバ。カニカクニ。トクカヘリマセ。イツカシガモト。と讀むは全音義の同一なるが爲にして、アメノがユクヒトノにてもミナカがココロシレバにてもヒがトクカヘリマセにてもあるにはあらざるなり。

全音義の同一なるが故に假借せるなれば、三十一音に讀まんとするも讀み得べきにあらず。讀み得べからざるなれども、一圓一音の日神事に據る時は其の全音義の同一なるが故に、三十一音のノリトに充當せし文字なることを知り得るなり。

されば固より

アメノミナカ又シヒイツカシガモトと称ふるも

ユクヒトノココロシレバカニカクニトクカヘリマセイツカシガモトと称ふるも同一なる身魂齋ノリトなるなり。

唯、後者は現代使用語に似通

ひたる語脈なるが故に、稱へ易きのみなると共に曲解者をも出し易かるべきを虞るるなり。

身魂齋のノリトとしての大意は死生觀に解きたる如くなれども、生死を通じて解脱を教へたるノリトなることは、涅槃經普門品と符節を合するが如くなるは奇なりと云ふべし。

日本の古典にはオトタナバタと記載せるのみにて、全全説明を缺けるところなれども、普門品には幸に僅々片鱗ながらも説明を傳へ得たるもの、其の他の各國各民族の間にも傳承有りしものなるべけれども、現存せるは唯一猶太の誓約に一語を載せたるを聞くのみなり。

されど猶太の誓約は其の内容に觸るるところ無く、法華經も僅に説明をなしたるのみにして内容を傳へず、日本民族傳承の神言靈としては其の内容を多く存すれども説明を缺ける爲、今人漸く之れを遺忘失念せんとせるは愛惜に耐へざるなり。

以上 昭和十年七月二十四日

第四章 死生解脫

神カミと稱マカツビへ、魔と呼び、人と稱し、物と云ふ。それは、そも、一圓相裡、生滅起伏の波であらうか。一音響中、長短交錯の人であらうか。

重ねて問ふ。神、果して神か。魔、果して魔か。人、果して人か。物、果して物か。我、果して我か。彼、果して彼か。其處に起り、此處に滅キえ、此處に生れ、彼處に死ぬ。生、果して生か。死、果して死か。

『莫囂ユクヒトノ圓隣之大相七兄爪湯氣吾瀨子之射立爲五可新何本』

「莫囂バクガウエン圓」と云へば、萬葉學者の間では、分らぬことの代名詞にされた程で、此の歌は、古來難解としてある。

「圓」とは、「まどか」であるが、「囂タカマしきこと莫き圓」と限定してあるから、單に、「まどか」ではなく、「高圓タカマ山」の用例の如く、「まと」と讀むのだとの意である。「まと」の「ま」は、圓滿具足で、○と畫くべきである。

「と」とは、止まるで、止むるで、テンである。テンではあるが、單なる點ではなく、中心點として、外廓を主宰し統率したのであるから、「まと」を圖解すれば、○ヒカリで、日神ヒノカミの義で、○ヒなる無宇宙が、一點に結び止められて、宇宙を築き成したので、零ヒなる一と呼ぶことが出来る。零を、人間的には、無と云ふ。けれども、それは、有無ウムと相

極大極小極無極え火

對した考なので、超絶的には、無と呼ぶべき有なので、零であると共に、一であるので、實^{ナクテアルモノ}在^{アリテアルモノ}で、存^{アリテアルモノ}在^{アリテアルモノ}で、一であると共に、二である。それで、「ひ」と呼ぶ〇が、そのまま、「ふ」と云ふ〇で、其の〇は、重點が有るから、そのまま、〇と呼ぶので、魂の「み」と、魂の「ひ」とが、等しく、「靈」と翻譯された所以で、一即三で、三即一で、^{ミハヒ}高天原に成りませる神。天御中主神。高御産巢日神。神産巢日神。此の三柱は、三柱で、獨神で、日神と稱へまつる〇にてましますのである。古老が、〇と書いて、「あめのみなかぬしのかみ」と訓ませたのは、此の間の消息を傳へて居る。古事記に、「造花參神」として、太安萬侶の傳へたのは、舊事紀に、「天祖」として、^{アメノミコ}天讓日天狹霧國禪日國狹霧尊と稱へまつるところで、日本紀には、「國常立尊。國狹槌尊。豐斟淳尊」と白しまつるのである。それが、^{ミコト}別天神なので、古事記の傳へに、國常立神を、別天神の次ぎに成りませりとしたのは、甚しき誤謬である。日本紀には、「國常立尊。國狹槌尊。豐斟淳尊」を、「純男」と記して、神ならざるの神であることを明にしてある。

神ならざるの神は、別天神で、神魔同凡の天御鏡と呼ぶべきで、宇宙の外に在るの「かみ」で、日止ならざるの日で、火人ならざるの火で、人ならざるの零で、「惠保婆」と稱する一神で、「獨神成坐而隱身也」と教へられてある。つまり、〇なる「かみ」なので、無宇宙の「かみ」だから、宇宙を築きたる後の「かみ」とは別なので、「別天神」と稱へまつるのである。

其の〇が、一で、二で、三だとは、物が、天で、地で、人だと云ふに等しいので、前者は、日本語の音義が、其の理を教へて居り、後者は、支那人の哲學的傳統とされて居る。

「ひふみ」とは、「火經身」と云ふに等しいので、私共が、最大最小として認め得るところの「火」と、其の火

の、此處に、其處に、燃えては消え、消えては、復、燃え出でつつ、有るとも無いとも分らぬやうで、然も慥に、燃えたり消えたりするさまが、我が身の、生老病死と遷轉すると同じやうに、いとも奇靈しく、妙不可思議なる「経過」が、存りと在る一切の實際である。實際であると認め得る、之を、「身」と呼ぶのである。如斯き物、それは、一切合切であるところの「天」で、總べてを産出するところの「地」で、産出せられたる「人」で、それが、復、「物」なのである。

「五可新何本」とは、人類萬有として、遷轉出沒する箇體が、何時かは歸結すると思ふところの、「大根本」イデテハカヘルオホモト「大中心」スベラサメタルミタマ「天御中主大神」アマノミナカヌシノオホミカミ等と稱へ來りし〇である。此の〇は、無の有で、零の一だからとて、先師は、センメン「〇と書き遺されてある。

人の知るかぎりは、成壞生滅しつつある。地球上に生育居住するものは、地球を家として、此處に安息し、活躍し、死滅する。死滅したる物の一部分は、地球上に止まるので、それは、固より、地球の一部であり、地球である。其の地球の死滅する時、勿論、我等の死體も、また其の一部分として、破壊せられ、地球の挂れる太陽系中に止まる。

その時の葬儀が、何程莊嚴な、崇高な、深奥なものであるかは、想像するだけでも、熱鐵の中に坐するが如く、堅氷の裡に立つが如く、威烈至極に感ずるのである。

破壊せられたる曉に、此の地球の死を弔ふ客は、誰誰であらうか。

我等の肉體身の一部は、蓋、其の時までも、土として止まり、火と成りて燃え盡すであらう。燃え盡したならば、「神吾田鹿茸津比賣の宇氣毘」に依りて、新しき國土を築き、楽しき生を喜ぶであらう。宇。

生魂神

多田雄二

(一)

玉の緒を結び結びて人の身は
い着くなるなる天安河。

白玉の眞玉まかたままつぶさ
にみすまるみたまたなるや御中
の神と神ぞ教ふる神ぞ宣らす
神ぞ守るなる神ぞ知るなる神の
宇氣比て神の宇氣比て神赫赫り
ます。

あちめあちめあすばかすやぞ
さからかすやぞおおおおお
おおおお。

ああひがてんじんゆうあいこ
うトハ八尺勾瓊の神挂ナレバく
らげなすただよへるくにヲすり
かためなすなる神言靈ニシテ圖
相ナラザルノ圖相ナリ。

此ノ圖相ナラザル圖相ノ元首
ヲ八咫鏡ト讚美シテ其ノ統治權
ヲ叢雲劔ト称スルナリ。

八尺勾瓊八咫鏡叢雲劔ノ音義
ハ天照坐皇大御神天照皇大御神
天照大御神ニシテいざなぎいざ
なみふたはしらのかみニシテあ
めのみおやあめゆづるひのあま

のさぎりにくはゆづるひのくにの
さぎりのみことニシテおほかむ
づみのみことニシテあめなるや
あめゆづるひのあまのさぎりに
なるやくにゆづるひのくにの
さぎりがみなるやあめゆづるひ
のあまのさぎりにくはゆづるひの
くにのさぎりのかみひとなるや
あめのみおやあめゆづるひのあ
まのさぎりにくはゆづるひのくに
のさぎりのみことかしこしニシ
テあめなるやおとたなばたのさ
やさやとくになるやしたてるひ
めのみをまもるなるあまてらし
ましますすめおほかみニシテ
あめつちはまだわかれぬをわれ
ゆきてはやくあけつとひとのと
がめぬるニシテふるべゆらゆら
とをふるベニシテゆくみづのか
へらぬしらほひとときものどに
なすぎそよのひとのためニシテ
あすありとわれはしれどもかみ
ながらかみのうけひてかみか
りますニシテひくまののしほく
むをみなとこよにもききまさ
めとひくまののニシテひるがほ
のはなさくかきねわがつまはひ
なのまろやにとをこそまてニ
シテふるのみややすのかはらに
ひとぞよるよをあさゆふのへだ

てあらなくニシテいそのかみふ
るのやしるのたちもがもねがふ
そのこにそのたてまつるニシテ
おほきみのまけのまにまにひと
はみなくにこそきづけこころひ
ろのとニシマシマスナリ。
生魂足魂玉留魂高魂神魂八重
事代主大宮賣御膳津神ト称ヘマ
ツルモマタすりかためなすなる
あまのぬほこのかみのかみわざ
ト称フルモ共ニ等シキ調伏済度
救出誘導摂入産出出生ノ神言靈
ナリ。
あなかしこ。
(一)

神魔を裁断しつつ示界に在る
り矣。
故に又、過去の言論行為を
次示界に摂入しつつあるのみ
ならず、過今来を通じて血縁有
しものよりはじめ、所謂親類
者を引導しつつ、一切衆生を
度救出誘導摂入生産せしめざ
ば止まざらんとする大業を行
つつ天翔り國駆けつるなり。
身魂城(ミタマシロ)とは
(ミ) 實也・身也・稔也・充也
満也・二十七也矣・地
修理國成たる曉也矣・
津示也矣・ヤマツミ也
國狭霧神也矣
(タ) 高也・足る也・満つる也
堆也・秀也矣・顕る也
也・美也・優れたる也
三十也矣・火産靈神也
(マ) 丸き也矣・圓也矣・満
矣・足る也矣・円満具
也・十也矣・満数にし
満数なれば空也矣・零
矣・修理國成したる曉
矣・統一魂神也矣
(シ) 死也矣・締むる也・知
也・知らず也・治らす
知ろしめす也・統ぶる
矣・主宰統一也・統治

にして満數、満數にして
窮數也矣

黄帝の八人而耳也矣。
以上

昭和九年十月八日午前〇時

秘稿「生魂神」解説

さて、秘稿「日本天皇国」の8頁下段にもあるとおり、

「ヤサカニノマガタマの^{カミカカリ}カミカカリ」とは、十四字秘言の神挂と同義であり、その内容は「くらげなす漂へる国を^{スリカタメナス}修理固成」という作業、即ち「^{マガツビ}妖魔を調伏し、それを外郭として中心に正しく帰順させることによって、神国（中心と外郭とが完全に統一された状況）を築成する」という作業である。

また、ヤサカニノマガタマとは、月読命の^{チカラ}諸力を器物として表現した用語であり、ここで言う月読命は^{ミヤ}天照皇太御神、即ち、「境地としての高天原」と同義である。

こうした高天原は「月相ならざるの月相」とも表現されるが、これは「人間の言葉では「月相」とでも表現するより他にないが、実際には、そこに何が「月」というカタチが実在している訳ではない」といった意味合いの用語である。

また、天照大御神は そうした意味での「高天原」の主神であり、建速須佐之男命はここから天降^{あまくた}って、葦原中国を統治する神である。

従って、そうした神の諸力^{ちから}を神器の名前で表現すると、次の『この「円相ならざる円相」の元首をヤマトカガミと讃美して、その統治権をムラキモノツルギと称するなり』という文面になる。

次の文章で列挙されている用語は、すべて、(三段目に書いてあるとおり)「調伏済度救出・誘導摂入・産出出生の神言霊」であり、即ち、「神国築成^{つと}(に努めるため)の言霊^{コトマ}」である。その意味において、一段目の「天照全皇大御神、天照皇大御神、天照大御神」も、二段目の「ふるべゆら、ゆらとふるべ」も、十四字秘言の同義語なのである。

ミタマ

また、次の「第二魂以下の身魂はへ」という一文は、
大幅に言葉を補って意訳すれば、以下のとおりとなる。

『^{クシミタマ} 奇身魂・^{サキミタマ} 幸身魂・^{マミタマ} 真身魂は、その人の生前の言動
(言論行為)が善いものであれば、その度合いに応じて
部分的に、言わば「純化」されており、

その「純化」された部分は死後、速やかに「日隠宮」で
粗から精へと組み直され、(未来 326-327 頁、参照)

ナホヒ

根本魂直日の一部と化して、もろともに無宇宙へと帰入
するのである。』

ミタマ

しかしながら、常人の場合、個々の身魂の中で「純化された
部分」が占める割合は微々たるものなので、「残りの、大半の
部分」をミタマシロに^{うつ}遷して察り、修理国成を促す必要
があるのである。(以下、「神葬齋 齋事次第」を参照)

陰の半面

太極(全体)

陽の半面

ミノカミ
日神(実体)

カンミムスビノカミ
神皇産霊神

アメノミナカヌシノカミ
天ノ御中主神

タカミムスビノカミ
高皇産霊神

カミムスヒ、ミオヤノミコト
神産巢日御祖命
(作り治らす神徳)

オホナホビノカミ
大直霊神

タカミムスヒ、タカキノカミ
高御産巢日高木神
(殺し奪う神徳)

即. 産土神
ウズスナノカミ

即. 鎮守神
ミマモリノカミ

ヨコ
鎮の活動としては
滋潤 ミヅ

(作用力)
神輪 カミワ
輪君 ワギミ

タテ
経の活動としては
殺威 ミヅ

カタメナス
(国成の神事)?

ワギミノカミワザ
「輪君之神事」
(神界築成のための破壊の神事)

無宇宙

高木神

放つ.

因果応報に
もとめて天誅.

宇宙

天若日子

受ける.

i) 放つ側から言えば
「高木神の天返矢」
タカキノカミ アメノカヘシヤ

ii) 受ける側としては
「天若日子の天返矢」
アメワカヒコ アメノカヘシヤ

(神界築成のために、
邪悪なモノを壊すための矢)
→ 悪因悪果.

「天から
かへ
返ってきた」

出典	弓	矢	受ける者
言霊の事	アマノハジユミ 天ニ渡す弓	アマノカウヤ 天ニ加え矢	アメワカヒコ 天若日子
古事記 (後)	アメノハジユミ 天ニ渡す弓	アメノカウヤ 天ニ加え矢	アメノワカヒコ 天若日子
" (先)	アメノマカコユミ 天ニ麻迦古弓	アメノハハヤ 天ニ渡々矢	"
旧事本紀	アマノカゴユミ 天ニ鹿見弓	アマノハハヤ 天ニ羽々矢	アマノワカヒコ 天稚彦
日本書記	アマノカゴユミ 天鹿見弓	アマノハハヤ 天羽々矢	アメワカヒコ 天稚彦

之れを見よ。
三年を過ぎたるものを頃者と云ふ。

海中に沈みて可伶道有りと云ふ。

然り。

之れをウミなり。

人間目睹せざるウミなり。

種子の発芽。

種子の保存。

稲や麦の種子にても幾年乃至幾十百年を保存し得べしと云ふミチの種子が幾千萬年、否否時間を忘れ、空間を忘れて、否否、時間も空間も共に自己とし、否否、其の自己をも捨てて時間もなく、空間もなく、無始終に存在し、存在せりとも思はざるは又、自然るべきではないが。

其の

シホツチノオデ。

ワタツミノイロコノミヤ。

ミチ。

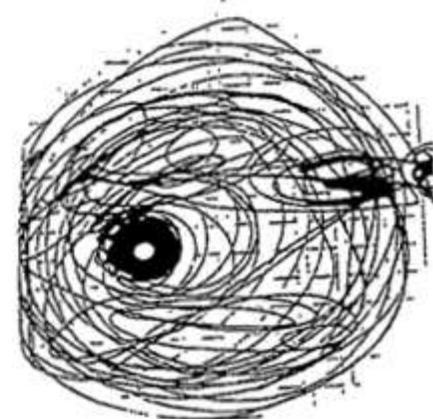
マナシカタマ。

ホホデミノミコト。

トヨタマヒメ。

ワタツミノカミ。

しは何如。



の如きは火火出見尊。

故に、ホホデミノミコトとは火にして、點にして、日にして日神なるヒカリなり。

①なるなり。

イロコノミヤとは妖魔を調伏済度したる浄地にして、空界なり。

マナシカタマとは、



図の如くにして、シホツチノオチなり。

主神を認めたる浄地なり。

されば、ワタツミノイロコノミヤとは主神有る浄地にして、

其の主神とはホホデミノミコトにして、主神と境地との不一不

二なるをシホツチノオチとも、

マナシカタマとも称して、オホ

ヤマトスメラギミとたたへまつるなり。

大直靈神なり。

ワタツミノカミとはウミの神にして、浄土の主なるアマノミ

ナカヌシノオホミカミにして、

アマテラススメオホミカミなり

ワタノハラなり、ウナハラなり

アマツイハサカなり、メなり、

女なり、陰なり、母なり、胎なり、胎盤なり、佛盤なり、湯なり、湯盤なり。

日新又日新なる無の有なり。

岱なり。

泰にあらざる山なり。

山ならざる山なれば海なり、

東海なり。

之れをミチなり、トヨタマヒメなりと云ふ、ヒフミにして、

ヒフミヨイムナヤコノタリヤ

モモチチミテリなり。

或時は人驚かす案山子かなと云ふ句がある。

靈念思考と魂と直日と直靈の異別を知らねばならぬ。

或知古老苦心刀痕

又見雪山捨身行

人間本来一點火

火聚又是非火聚。

弾く汐の潮のまにまに引くらに亦満ち満ちて月圓なり。

阿知米阿知米阿宇衰。

宇。宇。宇。宇。宇。止。

止。宇。

はるひひめはるひひめはるひめ。

ああひがてんじんゆうあい

う。

う。う。う。う。と。

と。う。

うとのみや。

うとのみやしろ。

うとのかみみや。

うと。

う。う。う。う。と。と。う。

神話の流れ

1. 天若日子は、[↑] ~~ともとも~~ 弓と矢を授かった上で、
中つ国に降りた。 ^{地界平定のための}

2. しかし、若日子は地界を平定せずに、

仁事をなまけていた。 (悪因、その1)

3. 高天原の側は、確認のために ^{きいめ} 雉女を送ったが、

若日子はサグメにそれの方をみて、その弓矢を使って

雉女を射殺してしまう。 (悪因、その2)

4. その矢は高天原に届き、高木神はそれをそのまま

若日子の下へ返した。

5. 悪因の結果として、その矢で若日子は死をした。

(悪果)

→ 実際には「ミヅの循環」のような「流れ」があり、

「逆行スル^{サガ}ハ^{ハヤ}急チ滅ヅ」という状況を、

「逆行」の具体的な意味も含めて物語化したもの。

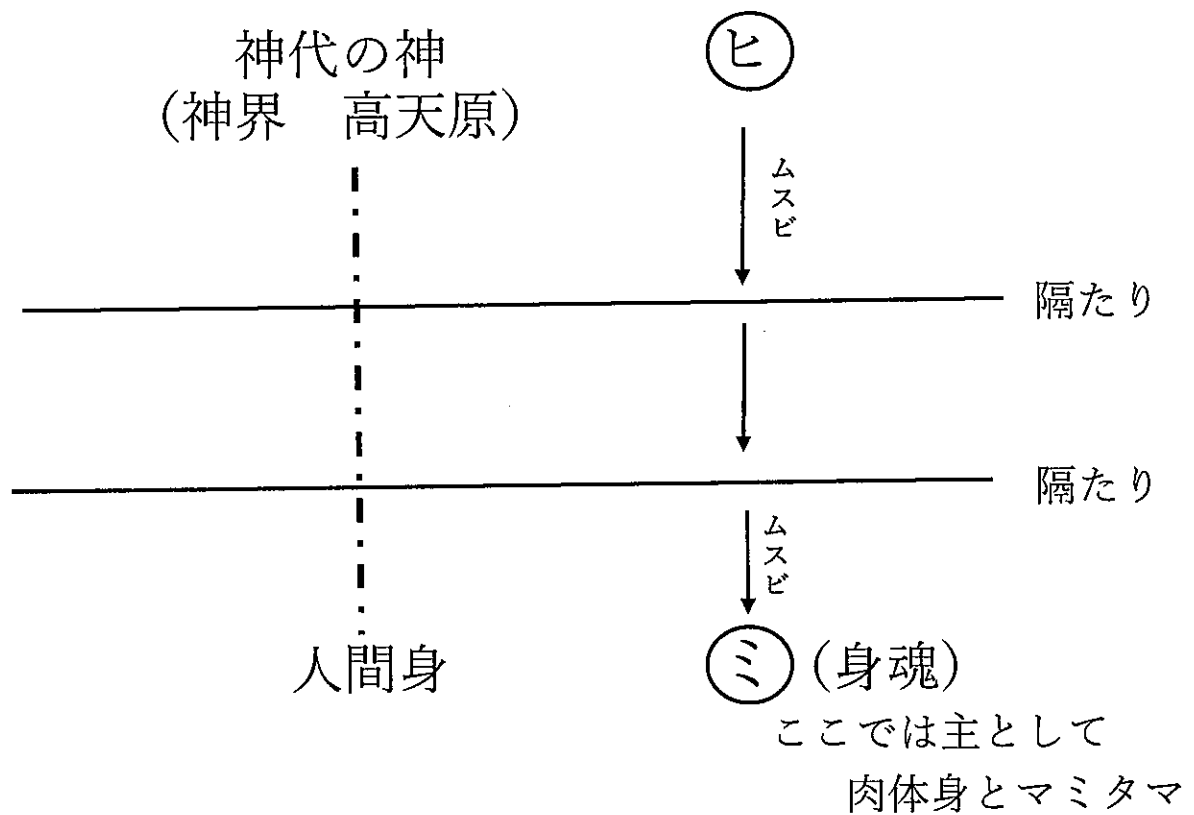
古事記は、その劈頭に、「高御産巢日神・神産巢日神」と稱へてあるが、之は神代の神の御上で、人間身の出生を教へたのではないから、「日」の字を用ゐ、日本紀の「高皇産靈尊・神皇産靈尊」と記して、「靈」の字を用ゐたのと同じやうに、「ヒ」の神の御事と拜するのである。

ひのかみの、かみわざなりて、ながむれば。あめつちは、いまや、みすまる。あめつちは、いまぞ、わかる。はるひひめ、しらすはるのは、かみのはな、いまさかりなり、おほひひるめのひたかみのみに。

その國は「日」の國で、その神は「日」の神で、人間身の未成らざる神界の事理である。さうして、清陽と重濁と、或は、精粗と、厚薄と、様々の異別は有るが、眞理は一貫して變らず、事實は眞理を離れるわけが無いから、人間身も、神代の事理をそのまゝに、「ムスビ」「ムスビ」し「ミ」である。唯、その神界を出でて幾度轉。神代を去ること幾時空。そこに隔りが出來たのである。隔りを我と我が身に築いたのである。

もしも、其の隔つるものを取り去るならば、この身此のまま、神代の神に連るので、生死一貫、顯幽一途。日神の^ミ光^{ミヒクリ}指し透るのである。その上で拜みまつれば、産土神とは、神産巢日神祖命にてましまし、鎮守神とは、高御産巢日高木神にてまします。

天^{アマ}なるや、天^{アマ}の返し矢、天^{アマサカ}離る、夷女^{ヒナツメ}の子が、神ながら、氷^{ヒメ}目矢^{メヤ}を受けて。神守る。眞賢木立てて。高知るや、天^{アマ}つ國玉。高彈くや、天^{アメ}の詔琴。人の身を、神とはすべく、人皆を、日止と成すべく、大虚空、焚き



隔たりを取り払って考えれば
人間神もまたヒノカミに直結している
(生死一貫 顕幽一途)

逆に言えば日神 (中心) の ^ミ◇のミヒカリが
「今ここ」にさしとおって、
「今ここ」もまた高天原の一部であると解るようになる。

→そうすれば、産土神が神産巢日神のウツシオミで
鎮守神が高御産巢日神のウツシオミである
と解るようになる。

第九章は、死生解脱の祕を教へ、

第十章は、宇斗の神言靈を垂示されたのである。此の神言靈は、一言の萬城主の主るところで、古事記は之を下つ卷に記されたが、事實は勿論神代紀である。

神の代の、神の祕事。人の身の伏し仰ぎつつ。今日もかも、國平けく。明日もかも、うら安くこそ。内外隔てず。

靜寧和平の神國樂園を築くには、唯是、爾が身を爾自、倭の青垣東の山の上に齋き祭ればよいのである。

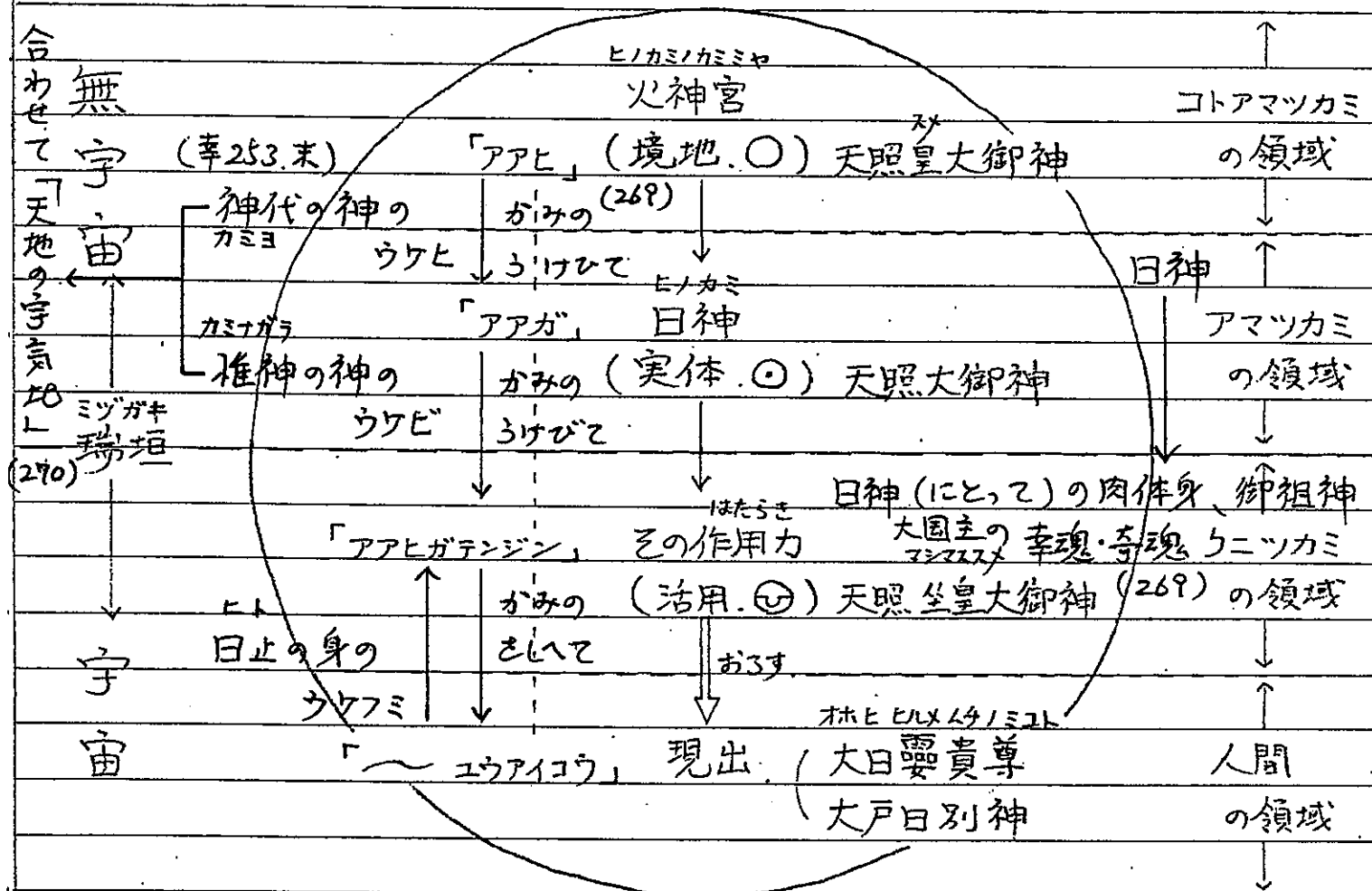
産土神の神徳は、^{ミハタラキ}そのまゝ「ハハ」と成り鎮守神の神徳は、そのまゝ「チチ」となる。合せては「ミオヤ」と呼ぶ。爾^ナが身は、固より「チチ」と「ハハ」との一つ身なれば、「ミオヤ」である。

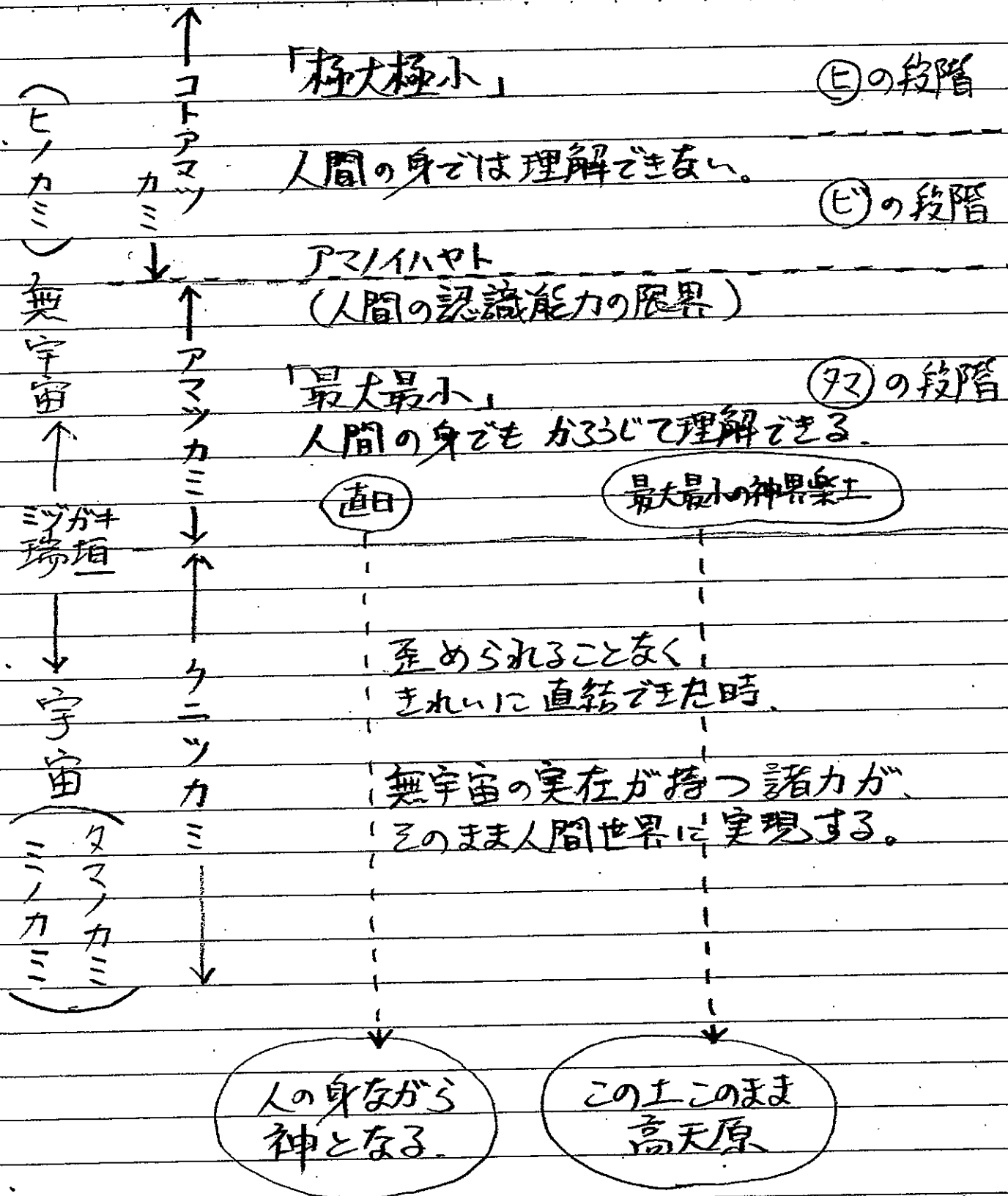
ちち、はは、みおや、みおや。なべてのひとびと。わが、さきのよの、ちち、はは、みおや、みおや、われに、ゆかりある、なべての、みみたま。みな、ともに、さとり、さとる。さとり、さとれば、あまねく、ひとつなり。ああひがてんじんゆうあいこう。と、たたへまつるなり。

日本の古典は、之を傳へて、

十十字秘言と大宇宙概念図

ヒノ カミ はたふぎ





その高天原は、唯一であつて、重重無盡又無量であるからとて、「ヒトツ」と呼ぶ。さうして、とも、とも書いたのは、此の故で、「鹽固袁呂固袁呂に畫き成したまへる淤能碁呂嶋」である。

「淤能碁呂嶋に天降り坐す」は、二柱御祖神で、それは即、天御柱で、中心の一點である。その一點の裏は、即、國御柱である。^{クニノミハシラ}二つであつて一つなので、その一である「大虚空」を拜みまつれば、その中心には、その全體を主宰統率し給ふ天之御中主神、即、天照大御神の坐しますのだとの意で、唯見る大虚空も、その大虚空の大虚空たり得るは、天之御中主神の坐しますが故で、八百萬神の蕃息し給ふは、二柱御祖神の坐しますが故で、その晃耀赫灼たるは、天照大御神の治ろしめし給ふが故である。

古典には、「天地初發之時。於高天原成神名。天之御中主神」とあり、また、

「伊邪那岐命大歡喜詔。吾者生生子而。於生終得三貴子。即其御頸珠之玉緒母由良邇。取由良邇志而。賜天照大御神而詔之。汝命者。所知高天原矣。事依而賜也。故其御頸珠名謂御倉板舉之神」と載せてある。

此の二つを、人間的時間の觀念で見ると、時代が別なので、天之御中主神の高天原は、天地初發の時で、伊邪那岐大御神のお生みになられた天照大御神の治ろしめす高天原は、後の代で、と云うやうに思はれそうだが、また、それでは、諸典の辻褄が合はぬので、高天原とは、天上だとか、天上の都だとか、天皇の都したまふところだとか、色色に説を立てて、話の筋を通らせようとする學者のあるものと思はれる。

同じ古事記の本文を、「^{ソシン}膂肉の^{カラクニマ}韓國竄ぎ通り」と讀む人の有るかと思れば、「此の國は韓國に向ひ、その爲に甚吉いところだ」と、全全反對の意味に解釋する人も有ると云ふやうに、牽強附會を仕事とするのではないかと怪しまるるばかりの状態である。

ヒツと神名として
表現するにはへ

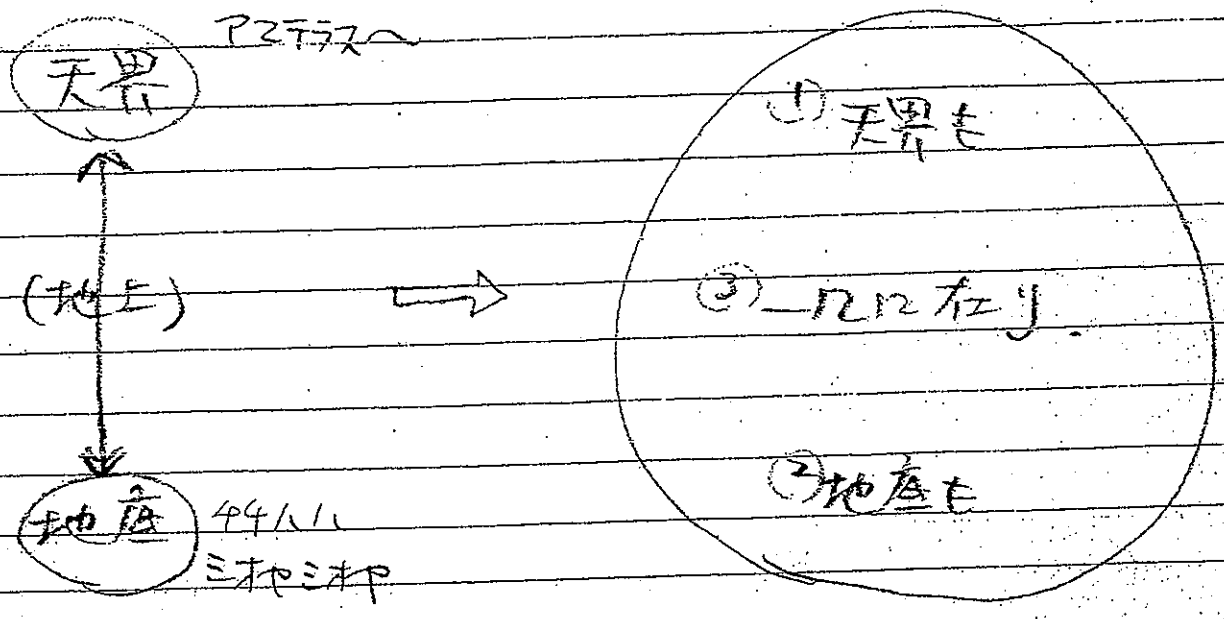
チチハハミオヤミオヤナベチノヒトビト。
 ワガサキリヨミチチハハミオヤミオヤ。
 ワレニユカリアルナベチノヒトビト。
 ミナトモニサトリサトル・サトリサトレ
 マネクヒトツユミ
 天界も地底も、実はヒトツであり、
 そのヒトツを称するには、左記のとおりとなる。

1
 天界地底
 2
 底土
 3
 アマテラスオホミカミトタタヘマツルナリ。
 ツキヨミノミコトタタヘマツルナリ。
 タケハヤスサノヲノミコトニチマシマスナリ。
 オホヤマトスメラギミエチマシマスナリ。
 カミトコソハタタヘマツルナリ。

元

死者に事実を伝えるためのコトワ

橋っていない状況 → 橋った状況
「サリサトシバアマネウヒツナリ」



生者の視点(地上)から見ると、

神々の領域(天界)と死者の領域(地底)は

全く別々の領域に見えても

「霊的な事実」としては、「あまねくひと」であり

死者のミタは最終的には神々の御許へ行く

1. 自分

2. 父母 ミオヤミオヤ

3. ナベテノヒトビト

皆ともに悟り悟る。

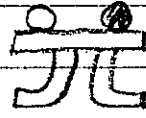
→ 悟り悟れば、「(すべしは) あまねくヒトナリ。」という

心境に到達する。その心境をまた、

「天果地広存在統一」をも表現する。

その境地に対する事件としては、三妻子の知恵を二ける
ことができる。

天界地底在於一円



あるいは



常識的には、天界（顕界神域）と
地底（幽界魔境）は別々のものだ“が”、

霊的な真実としては、ヒトツ なのである。

「天界地底」は領域の問題であり、

「神魔」（カミとマガツビ）は 箇体の問題なので、

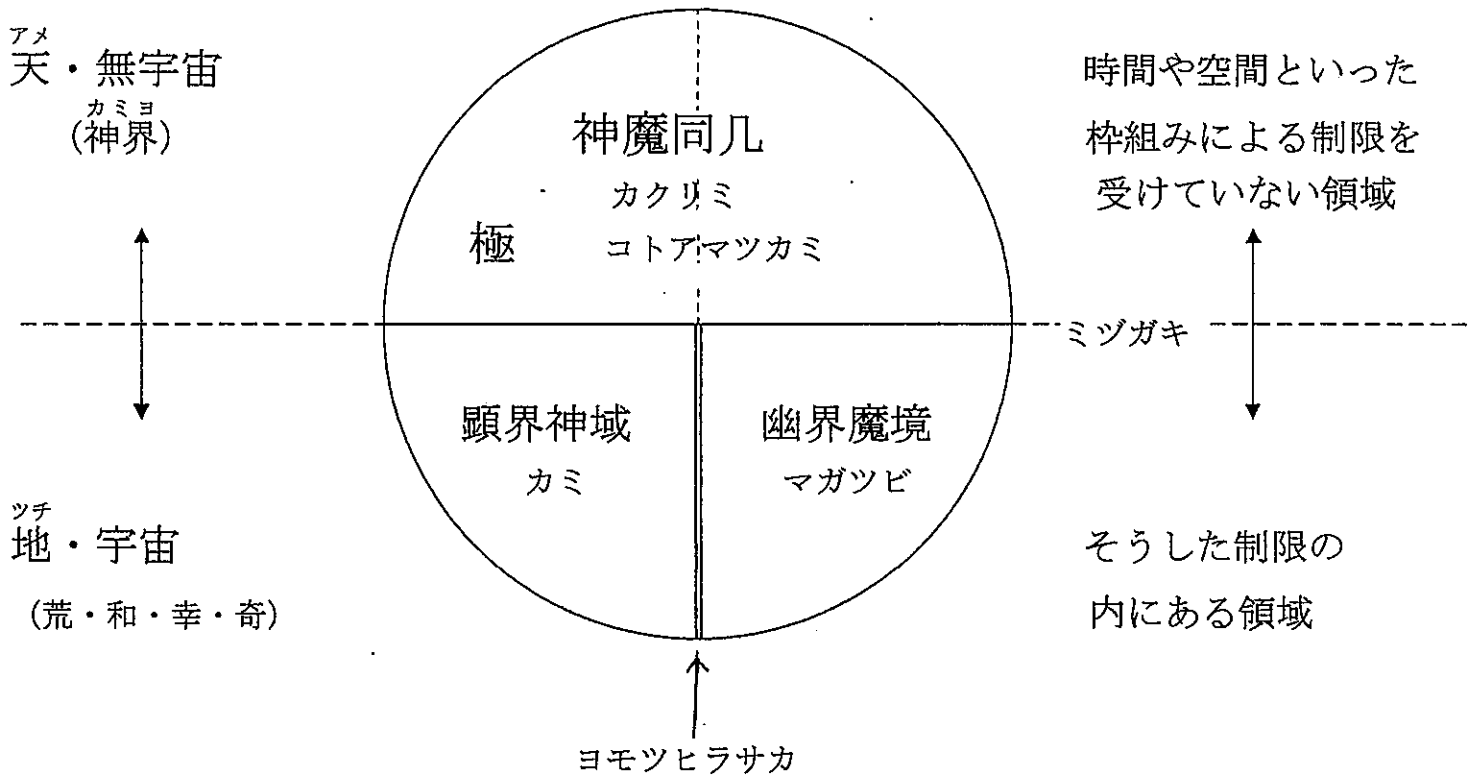
別々に考える必要がある。

→ 但し、原則としては、カミは天界に属し、

マガツビは地底に属する。

アマツチ
天地概略図

アメとツチを合せて、大宇宙と称する



この二項対立の図式は地^{ツチ}の側でのみ有効

天^{アメ}の側には及ばない

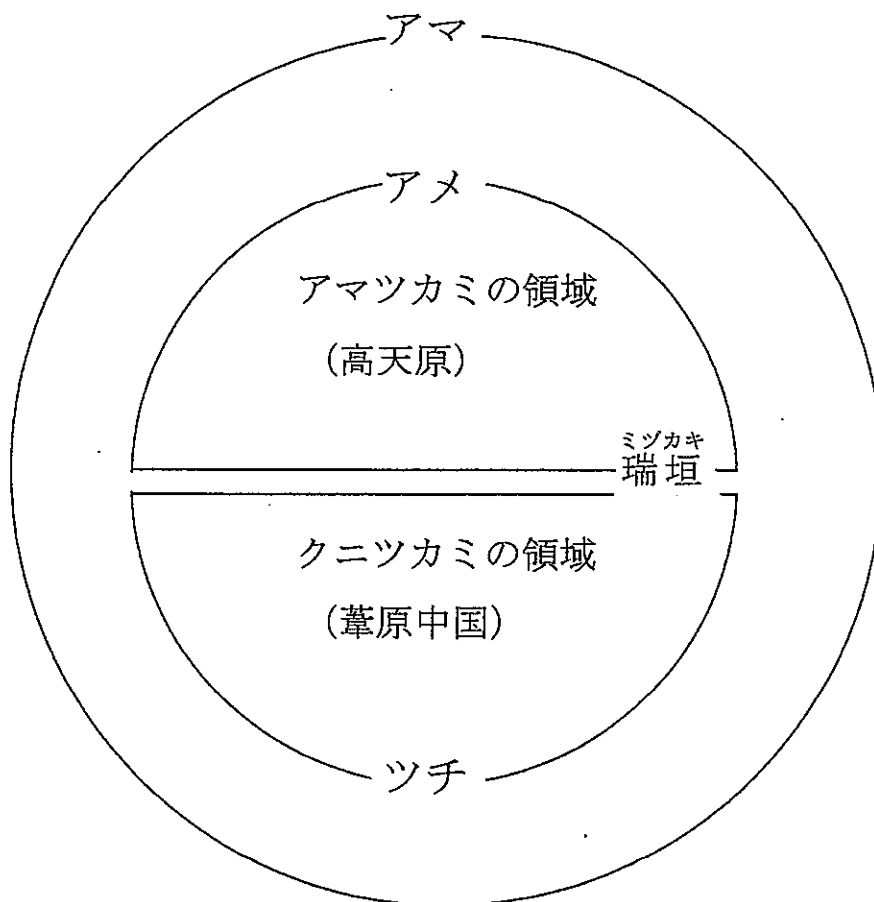
天^{アメ}とは、人間から無宇宙を見て「ア」と驚嘆する、

という時の「ア」の領域

天^{アメ}とは、物理的に言えば、宇宙創世以前の領域

天地概略図 第二版 (あくまでも概略)

コトアマツカミの領域 (無宇宙) -----	アマノイハヤ (天石屋)	} 全部あわせて 「アマ」
アマツカミの領域 (無宇宙) -----	天アメ	
クニツカミの領域 (宇宙) -----	地ツチ	



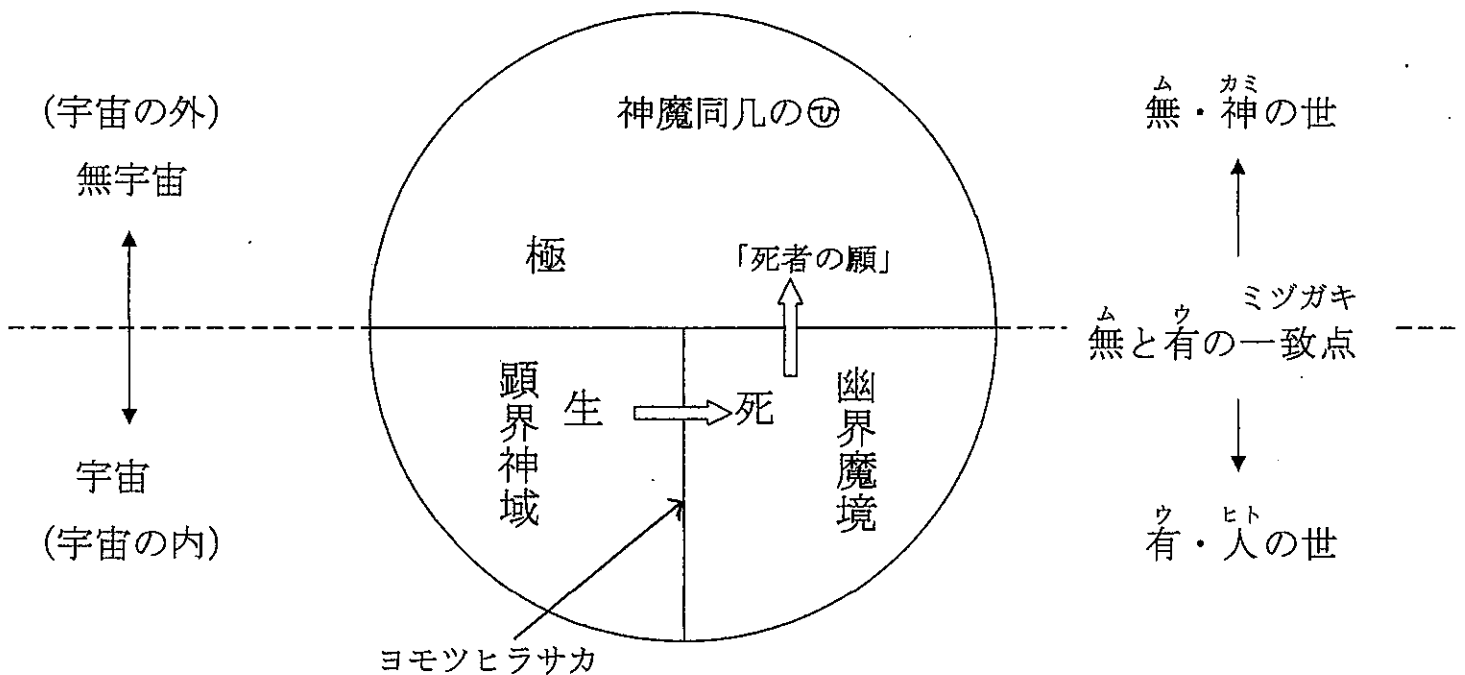
○「高天原」は狭義では「アマツカミの領域」を指す。

○現実には、「クニツカミの領域」は、顕界神域 (カミの領域、狭義の中津国^{ナカツクニ}) と幽界魔境 (マガツビの領域、黄泉国^{ヨモツクニ}) とに分かれている。

(第一版を参照)

死者の願ひ

「㊦の教へより」



1 頁下段 「人間的身心の明らめ難き〇」とは、

『無宇宙の零は、人間の身では明瞭に認識することが極めて困難である』
という意味。

仮に〇と表現しているが、この同じ実体を、「種子」としては㊦と描き、
「その㊦のままに築かれた筒体」を⊕と表現する。

2 頁上段 「無と有の一致点」

上の図では、宇宙と無宇宙とを合わせて一個の円で表現してしまっている
ので、図象としては「一致点」ではなく、「境界線」になってしまっている
が、これは単なる表現上の問題であって、何ら本質的な差異ではない。

2019.12.24.提本

神魔同凡とアマネウヒトツ

合本236頁によれば、^{どうき}神魔同凡とは、^{カミとマガツヒと}神魔と正しく
^{ばい}割割した上での同凡である。

だが、割割の「基準」は、あくまでも無宇宙の側^あに在る。従って、
その人の意識が無宇宙のことを理解できるようになって、
初めて割割と同凡は可能となる。

即ち、宇宙の側では、神魔は同じ場所で雑糅混濁して、
文字どおり「玉石混交」の状態にあるが、無宇宙の側では、
(同凡)
それらは同じように同じ場所^(同凡)にありながら、「基準」によって
正しく割割され、整理された状態となるのである。

換言すれば、日常的な「宇宙の側の意識」とは別個に、新たに
「無宇宙の側の意識」^{ひと}を獲得すれば、人間はこれによって
^{カミ マガツヒ}神と魔とを正しく弁別することができるようになる。

このような「二つの意識状態」を得た暁を指して、
「天地初発」などと称する。

この段階では、まだ「宇宙と無宇宙との違い」の方に
力点が置かれている。

しかし、次の段階では、二つの意識状態は統合される。
即ち、無宇宙の側に視点を置いて、「一切の^{しょうへき}牆壁が無く
なる」という意識状態に移行する。

これが「サトリサトレバ、アマネウヒトツナリ」の意識で
あり、もはや「宇宙と無宇宙の区別」すら問題では無い。

まとめると、神魔同凡はあくまでも無宇宙の側の話で
あって、宇宙の側の話では無いが、さらに進んで、
宇宙も無宇宙もひとまとめに考えるのが「アマネウヒトツ」の
意識状態なのである。

チハハニヤサナデ、ミタマ

父母乃祖乃宗諸有身魏。

發得菩提妙音吉祥。

妙法蓮華經普門品。

衆生若有受諸苦惱一に稱名觀世音即
時觀其音聲即得解脫。ベキナリ

念彼觀音力妙音觀世音 德音 海潮音

具一切功德慈眼視衆生 福聚海無量
故觀世音佛。

父母乃祖乃宗諸有身魏城。

力ズの起源

人間に「数」が有る。数の運用に依つて他の生物に優る生活を営み、文化を築く。此の数はどうして起つたのか。私どもの言論行為はすべて、自分自身から起る。自分自身の組織に基いてそれが、そのまま外に現はれる。従つて「カズ」もまた、自分自身の内に在るものが、外に現はれたことに違ひはない。

さて、自分自身を省察するに、最初は、漠然と見て「一つの魂だ」とするその「一魂」を分割するとして、初は二分する。更に二分し、又更に二分し二分して窮極に到達するとする。けれども、その窮極と呼ぶものが、果して有るであらうか。恐らく、有るであらう。が、また恐らく、無いであらう。

想ふに、「窮極」は、無くて有るので有つて無いのであらう。このことは、この「一魂」を累積し累積して、有らんかぎりを累積し盡したとした場合もこの分割し盡した場合同様、それが、有るであらうし、また、無いとも言へるであらう。で、このやうな状態は「有なる無」でもあり「無なる有」でもある。

両様の表現をするのは、分割し盡したと見た場合は、「無なる有」で、それがまた、「有なる無」だとも言ふべく、累積し盡したと見た場合は、「有なる無」で、また「無なる有」だと言ふに當る。それは、説明の便宜で、詞

を変へるまでで、事實は、ともに、〇と描くべきである。つまり、「無い」のである。けれども、頑空・絶無ではないので。また、「有る」でもある。それは、計算の場合に、〇は零で、数としては「無い」と算へるが、もしもこれを取り除けば、「位置」がわからぬから、計算は成り立たない。で、この、「零」は「無い」ものであり、有るのでもある。これを古典には、「高天原」とか、「虚中」「虚天」などと記してある。が、共に、それは、「神の生れられる所だ」とあるから、実に面白い。

さて、この「無」即、「零」だが、これは、全宇宙の一切合切を包括して居るのだから、勿論、一切の数は、此の中から生れる。「一二三四五六七八九十百千万」等、皆然うである。仮に譬へて言ふならば、「零」は空間で、「数」は物体と言ふことができる。空間が無いならば、物体の存在を認めることはできぬ。或は又、「零」を大海に譬へるならば、「数」は、そこに遊ぶ魚とも言へる。この場合の空間や大海は、明に、物体や魚類を産出する母胎であると同様に、この「零」も「数」を産み出す母胎である。

ところで、この「零」だが、これは一切合切の数を産み出すのだから、最大の数、或は超絶的實在で、「計算を越えた・計算に上らない・数と名づけることのできぬ数」などとも言ふべ

きである。と同時に、分割し盡した最小のものが「零」だから、これは明に大きいとか、小さいとか、多いとか、少いとか、計算することのできぬ「窮極」である。

すると、「窮極」はやはり「實在」のである。その「實在」とは、即、「二」である。

「無」と見たときには、「零」であり、「有」と見た時には、「二」である。そのもの自体に交りはないが、それを観る人の異なるばかりに、「その名が変る」。さうして、これは、すべてを産出するのだから、同時に「重重無盡無量」である。

そもそも、「箇鉢」の成り立つには「種子」が無ければならぬ。その「種子」は大きい面から観れば、全宇宙神であり、小さい面から観れば、最小の「種子」である。この最小の「種子」が、最大な全宇宙神の「力」に由つて旋回し統一し、重なり重つて、各自各箇各箇の存在を示す。

ここで、まことに奇妙で、最も重要で更に、修行者の誤解し易い、二つの問題を指摘しておきたい。

その第一は、最大としての「零なる一」は、全宇宙を包括してゐるのだから、「二」「三」と殖えようはないと思はれ易いが、この場合は、最大なる一が割れて、二、三、四、五と別れてゆく。のだから、数として見れば、それが、つまり、増すと言ふことになる。分割

されるから減るのであるが、反対に、数は増すのである。それだから、この全宇宙を数として、一と見れば一であり、二と見れば二であり、三と見れば三。四、五、六、等と見れば、皆共にそのそれぞれなのである。

第二の問題は、この「零」即ち「〇」を重重無盡と見た場合、「その各々は決して同一ではない」と言ふことである。譬へて言ふならば、箇鉢箇鉢を人間として見るならば、すべてが人間である。けれども、分けて見れば、男女國籍老幼の別は云ふに及ばず、その言論行為の同一な箇鉢は何處にも無い。で、その最も異つたところの男と女。

それが結合して、夫婦となるわけである。もしも、全然同一ならば、結合の要もなければ、結合することもできぬのである。異なるが故に、結合することができし、結合して、新なる箇鉢を産出するのである。

さて問題をもとに返して、箇鉢の成り立つ初めですが、その種子としての〇が、内容の異つた別の〇と組合ひ重り合ふと、勿論、〇である。さうして重ると言ふからには、必、重つた「点」がある。その重点には、また必、表と裏とがある。で、先づ、その重点の「表」を考へて見たい。

舊約聖書の創世紀に、「神その象の如くに人を創造たまへり」「エホバ神その創造たまへる人より肋骨を取りて女を成り」とある。これで、「一」が

「二」になつたのだが、ここで重要なのは、この創造には、全宇宙神の「力」が原動力であつたことである。

さて、かくて、「成立した」簡鉢は、大根本の種子である全宇宙神の「力」と、次ぎの種子としての「男」と、更に、之れと結合すべき「女」との三位一體である。これを簡鉢の位置から見れば、男と呼ぶべき最初の「〇」と、女と呼ぶべき次ぎの「一」とが結合して、「二」と呼ぶべき新しい「簡鉢」が出来た。さうして、大魔王神力、全宇宙神の「力」が之れを創造たといふので、この「神の力」を、数としての「三」で、「〇」の「重点」だとする。さうして、これを重点の「表」と呼ぶと同時に、この創造の「神力」は、必や、破壊をも司る。なぜならば破壊せねば、創造の爲ようは無いからである。この破壊の「神力」は、数としての「四」で「重点の裏」で、「全宇宙としての（神魔）の半面と見るべき大魔王神力である。

以上で、簡鉢の成り立つ原型が整備されたのである。この「簡鉢成立の原型」には、さきに譬で云つたところの空間なる外廓の有ること、またもとよりである。この外廓。即ち、大空であり、大海であるものとは、また勿論「母胎」で、その中に、魚の如く、鳥の如く万有と呼び簡鉢が生育する。これを数とすれば「五」である。創世紀で言ふならば、エデンの園に、男と女とが

まだ禁断の木の実を味はず、平和に安楽に暮して居る姿である。かくて、「数」は、五で成り立つ。五で足りるのである。それで、「五」を「成数」と呼び、また「正数」とも言ふのである。

物の生を吐けるには、先づ、陰陽の合体といふ前提がなくてはならぬ。

動物世界の然る如く、山川草木の世界も、その形こそ異れ、必やまた然うであらう。何故ならば宇宙の眞理は一貫して、変らぬからである。さて、この陰陽を形にあらはせば、凹凸となる。この凹凸を前述の〇の中に納めて見ると〇いふ恰好になる。これが太陽の象形であり、日の字源だといふから、古人の明には今更の如く驚く。陰陽の合体によって生じた物は、又必や陰陽の合体でなければならぬ。何故ならば人の生める子は人であり、猫の子は猫であり、犬の子は犬に外ならぬからである。繰返すが宇宙の眞理は一つである。

宇宙は、全体であれ、一部分であれ大であれ、小であれ、一切合切、この②である。この②は、陰陽であり、男女であり、神魔である。そこで、美しきエデンの園はまことに神の國であるが、しかし、この神園にも魔が深く潜んでゐる。それに留意せねばならぬ。果せるかな。蛇のすすみに依つて、禁断の木の実を食つた人間は終生、否、否、子孫孫に至るまで苦しみ悩まねばならなくなつたのである。それで、

正数なる五が、実は、その奥深く、この魔を抱いているのである。これが、五の次に来る六である。故に「六」は「五の余すところのもの」「五の産出するところのもの」であるが、未、簡鉢をなしていない。即、表面に顕れていない。それだから「零」である。で、これを「六の零」と呼ぶ。颱風の中心は、無風状態であるそうだが、実によくこの「六の零」を現している。この六は、五の制御力が緩むとすぐ暴れ出すから始末が悪い。これが「七」で、

「ナ」である。七は勿論颱風そのもので、菜とか、名とかの如く、多数であり、我等の周辺である。しかし、颱風が永久に吹いてはならず、人間が何万年も生きてゐても困るし、草木が何億年も生えていても始末が悪い。始末が悪いどころか、それでは固定で、膠着で、無限に流行転換する宇宙の事理に反するので、これは適当に殺されたり、又活されたりする。

この殺活の妙用を司るのは「八」である。八は「ヤ」で、「矢」である。出でては帰り、帰しては又行く。即、天界にも地底にも自由に出入往返する。この「八」の働きによって、宇宙の万有は整理されて平衡を保つ。この八の活用によつて整理された数が「九」である。その最も好い例は地球である。そして、数の段階はここに窮る。で九を窮数と呼ぶ。九は「コ」である。「コ」は八に依つて生み出された兒

である。この「九」をまた「ココノ」と数へる。「兒兒野」で、窮数として總べてを攝理したのである。日本語で数を算むに、「ヒフミヨイムナヤコト」と呼び、また、「ヒフミヨイムナヤコト」コノタリヤ」とも呼ぶのだから、九の次の「十」は、「ト」であり「タリヤ」であり、完全円満に具足したので、天界と地底とを一周し得たので、満数と呼ばれ、神人と称へられるのである。

「タリヤ」の「タ」は、「足り満ちた」との音義であり、「リ」は、調伏済度の音であり、「ヤ」は、終止符であると共に、前進上升の義である。つまり、出入往返である。それで、十は、「一二三四五六七八九」が完全に統一し、元の一に帰つたと言ふので、所云、「九魂統一、十魂尊貴の玉鉢身」なのである。

これが日本民族の承け得て来た「神数観」の概要である。

「唯独」。我「唯独」。万人悉皆親健。兒孫蕃蕃。稔豊穰

昭和三十一年十月三日

（「未来誌」より）

結繩

p2 ~~下~~ 段末付より

多田雄三は基本的に易經の既存の解説を
全否定する立場を取る。孔子批判もその一環。

孔子の云う数理（奇数—天、偶数—地）を批判して、述べる。

1、天であり、地でもある。（太極）陽極でもあり、陰極でもある。但し、無極ではない。

2、基本的には地であるが、また天でもある。

3、基本的には天であるが、また地でもある。

4、地でもあり、天でもある。（種子）ここでは「箇体としての原形」の意味。

箇体成立のための「資料」でもある。

5、天でも地でもある。（成数）「箇体」として成立したの意味。

6、天でも地でもない。（空零の数）箇体からはみ出した「零」のこと。

7、地（天を産出するところの地）

（としてまことよりさす。「非郭」）

8、天地（天地開閉の数）天返夫のように往つては帰つて来る「や」の作用をえらう。

9、天（地を築きなすところの天）善美を極めたもので「数の終り」九重。

10、天地（陰陽統一の数）統一魂

九が完全に統一した状態のこと。

完全なる統一体たる「実」を現した状態。

カミヨイツヨ
「神代五代」の説明

一円

一^ヒ

二重（必ず）

二^フ

三重（重なるからには重点がある）

三^ミ

四重（重点には表裏がある）

四^ヨ

この理念を基本として、すべての物が成り立っている。

これらは、ほんとうは分割できない存在であるが、便宜上別けているにすぎない、としています。

この「一^ヒ」は、図のように、「二^フ」であり、「三^ミ」であり、「四^ヨ」であるので、この集合してできた簡体を

「五（イ）」とよんで、古典では「神代五代（カミヨイツヨ）」と呼ぶのでありとしています。

その簡体は、「すべての物の種子」を意味し、「神の代（カミノヨ）の存在」を象徴的に表現している、としています。

そして、この「種子」が生育して、日月星辰、山河草木、風雨電雷、人とも万有ともなるのである、としています。

の神国にては「皇孫命」と仰ぎまつる。各々その時とその処とその人人との異なるが故にその名の異なるまでで則、「ミコト」で「キミ」で「ワガオホキミ」で「スメミマノミコト」で「スメラギミ」で「カミ」にてまします。

別の詞で言へば(極)で(無極)で(極無極)で(ヒ)である。

その象は^{スガタ}一円で二重で三重で四重である。一円とは○、此の○は必二重から成立つので三重だと云ふ。それは、^{カサナ}重るからには重点が有るため、そのまた重点には表裏があるから四重なのである。之れを基本として都べてのものは組織される。実は然う別けられるのではないが、説明の便宜で仮に別けるまでである。と云つても(ヒ)なる(一)の成立が然うなのだから然う説明するよりほかはない。所云「一円相」で、文那文字に伝へた(日)で①なる①で太陽である。さうして此の文字に由つて日はすなはち太陽でまた太陰であることが分る。それは凹凸の結合が①だからなので此の①なる一は即二である。一が中心で二が外郭でその中心と外郭との包含合驛が一で、それは三で四で二である。が此の二で三で四なる(一)は此のままで箇驛を成すのではない。箇驛成立の原型であるに過ぎない。此の四が百千万と集合してはじめて箇驛が成立する。それを数としては五で(イ)と呼び(イツ)となす。古典は之れを「神代五代^{カミヨイツ}」と教へてある。まことに是れ神の代で都べての物の種子である。此の種子が、成育しては日月星辰とも成り山河草木とも風雨電雷とも成り、人とも万有とも成る。それで、人天万類一切合切その本^{ヒラ}を發き来れば○である。

国家組織の上で「民主」とは全民人が此の○の象^{スガタ}を頭はし此の用^{ヘタラキ}を為し得た時初めて云ひ得るので、古典は之れを真經都鏡^{マフツノカガミ}も称へて天照大御神の「ニギミタマ」だと教へられたのである。

全人類が天照大御神の「ニギミタマ」として新邦を築成する時、その世界は一円晃耀の○の国で神界樂土であ

言靈祕説(断簡)

多田雄二

山裡一點火
山上一圓光
山外一塊土
山下一團人

今日今時十種神

之是いそのかみふるのやし
のたちもがもねがふそのこに
のたてまつる又是いはつまさ
き而天香具山即おとたなばた
則觀世音而阿弥陀即佛者極大之日
即人者極小之火

春鶯在樹神人不聞
之即魔樂之やまざとはふゆこ
そよけれひとめかれかみのこゑ
のみみちにぞみちたる

人間行路如羊腸
行人去来似風雲
薄暮靄霧如魔境
好去好来似大明

やすかれとわれはいのるをひ
とのみはそれともしらでよそに

ながむる

山裡清明一塵不起

山外擾亂風雨將到

はるののにわれはあそべりさ
くらばなにほへるのべにわれは
あそべり

春鶯愛花 花喜鳥歌

行くみづのかへらぬしらばひ
ときものどになすぎそよのひ
とのため

人界地底別春存

天界魔境豈無火

古人傳へてオホナホビノウタ
と云へるもの古今和歌集第二十
巻に有り。

或はオホナホビノウタと傳た
るものあれども共に非也矣。

アママトの眞理を教へたる神
樂歌也矣。

されど神界の眞理を傳へたる
ものにあらざるのみならず天界
の眞理をも傳へ得ざりしは惜し
きことなり。

之れを傳ふる其の人に非ざる
が故に其の理通ぜざる也矣。

さればとて此の歌詞は空界の
眞理を傳へたるにもあらねば人

界の事相を咏めるにもあらず。

理義不通のもの也矣。

昭和九年二月六日

アママトとは即アマノカヘリ
ヤにして、アマノカヘシヤにし
て、アメノミナカヌシにして、
タカミムスビにして、タカキノ
カミにして、ヒフミにして、ア
チメにして、タリヤにして、カ
タリベ也矣。

カミ也。神人養成の道場也。
カムにはあらざる也。カムは
産出の胎也。

日神言

イソノ

カミ

フル

ノヤシロ

ノタチ

モガモ

ネガフ

ソノコニ

ソノタテマツル

句切を云はば亦九句と呼ばざ
るべからず。

見よ。一首又一音響なる三十
一音にして九言而、ミタマフリ
ノウタと称するも宜し。ヒノカ
ミノカミコトバと称するも亦宜
し。ミタマシヅメノウタと称す

るも亦宜しき也。

神言靈は今時人類使用の言語
と相離距ること甚遠きもの多き
なり。

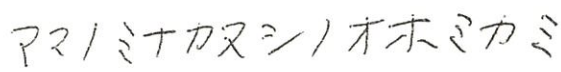
可知。神言の各音各義、各言
各義、全言全義にして、必、神
道の教文なることを。

又必、魔界調伏神界構成の神
言靈なることを。而して又更に
一圓相なると共に一音響なるこ
とを。

先に萬葉集中より撰出したる
十八首は皆悉、一音響にあらず
又一圓相にはあらざれども天界
眞理の教文たることを失はざる
もの也。

稗田阿禮作歌も亦一圓相にあ
らず一音響にあらずと雖、神界
の眞理を詠出しえたるもの也。

みたままつりにあす
アマミカヌシノ
オホミカミの
先祖諸魂の
慰霊のやり方
オホミカミ



水無月の夏越しに被一すまん
は千年の命延ぶと云う

夏越しの被褥

(毎月のみそぎの時)
西の意大森原の沖の瀬は
流れを被う磯の葱液

阿波賀上吳明友環友

皆得解脱

④方代前生の父母祖の泉の魂

眞宗氏前王の父母祖の京の魂
縁由諸有諸魂

金二 前生の父母祖の宗の類也

緣由諸有諸通心

みたまのつりにあす
子 沼田代前生の父母祖の京の魂

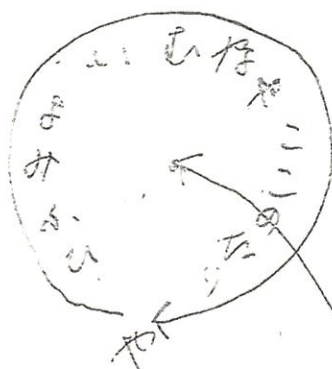
記入

心身と清澄に

筆に受火

二十一 秘言五巻入

ひふ、かよい、ふたや、ここのたりや
ももちちち、かこり



ももちち
みそり

紙に受火し紙を返す
目の上にかける。と
息を吹きつけ、諸魂を
一處に歸入させる。

みらい 第廿一号

第廿一号は、第廿号の連続である。

私どもの常識として、家とか国とか云へば、家族とか国民とか呼ぶべき、「人」の在ることになる。ところが、前に述べたように、大虚空^{オホミソラ}とか、大海原^{オホウナハラ}とか呼ぶのは、唯、「境地^{トコロ}」を指すので、⊕とか、○とか、□とかのやうに描く。そこには、人が住んで居ない。人が居なければ、家とも国とも云ひがたい。更に厳密に云へば、「境地^{トコロ}」とさへも云ひがたい。何故^{ナゼ}ならば、それは所謂箇体を認められぬので、・とか――とか○とか云ふに過ぎざる「極」である。極小であり極大であり、極大極小であつて、古典に伝へたる⊙である。此の⊙は、それ自体が境地とも成れば、主体とも成る。さうして、その境地なり主体なりを顕はす「種子」なので、単に境地とも、主体とも呼ぶことのできぬ「唯^{クダヒトリ}独^{トリ}」である。

「唯^{クダヒトリ}独^{トリ}」には、中心が無い。中心が無いから、外郭も無い。外郭も無く中心も無いのは、常識を超越^コえた存在で、或は古人が「実^{ナクテアルモノ}在^ニ」だと云つて居り、空とか無とかの仮称を用ゐてもゐる。常識を超越^コえた・常識の計量に上らぬ・所云非思量底の⊙である。

此の極大極小の⊙。それは即、大字大宙と呼ぶるので、人間未知らざる「秘密境」である。まことに、私どもは、幸なことに、此の秘密境^アが在るために、之れに因つて、獄裡の苦汁も消散し、滅却し、極重惡^{△△△△△△△△}の罪人も

△△△△△△△△△△△△△△△△
救済せらるるのである。

唯、「這箇」の「ヒトリ」。

「ヒトリ」の裡には、罪も尤も起り得ない。在り得ない。起り得ず。在り得ざる。㊦。

宗教が人間身を救ひ得るのは、唯、此の「秘境」に由るのみである。日本天皇の大祓が、極重罪惡をも容易に

「持ち佐須良ひ失ふ」所以のものは、まことに此の故である。人人は、「如是」の日本神道の宗教としての重要性

を知らねばならぬ。まことに幸なことに、人には「如是」の「秘境」を語る「言霊」が有る。如是の「秘境」を

見るべき「㊦」が有る。如是の「秘事」を行ふ「神秘」が有る。矣。さうですけれども、「如是」の「神秘境」

は、常人には語ることができぬ。語るべきではない。常人が、「超直入如来地」だとか、「善人なほ且成仏す、

況んや悪人をや」などとか、「一念声名即得解脱」などと聞けば、因果撥無の惡業をも意に介せざるやうにも成

りがちである。それ故、輕率に話してはならぬ。人を教へ導くには、何時も、相手相応でなければならぬ。先師

は居常、相手が「ナムアミダブツ」と称ふるならば、自分もそれと一緒に「ナムアミダブツ」と称へ、「アーメ

ン」と称へる相手ならば、自分も亦、そのやうに称へつつ徐ろにそれ等を誘導して余すところ無く救済せよ、と

お話になられた。さうすると、宗教必しも宗教の範圍内のみでとか、宗教と倫理道德の範圍とはおのずから別だ

などと區別してはならぬ。常識の範圍を越えることのできぬ人には、た易く「這箇」は分らぬのだから、善因善

果惡因惡果と云ふやうな因果應報を説きつつ徐徐に「神秘の境」へ導くこともまた必要である。

「仮令百千万劫を経るとも、所作の業は決して尽きない。それで、因縁の会ひ遇ふ時になれば、その果報は必

受けねばならぬ。」此の原因結果の連鎖は、動かすべからざる宇宙万有の鉄則である。現象世界は、此の鉄則に